とうのすみか
陶の棲
（陶磁器）

http://watanabeasako.com

作品から伝わる想いは
なんでもいい。
溢れる想いから生まれる
作品は、
誰かにとっての
「特別なもの」へと変わって
いくのでした。

大学ではプラスチックを素材として造形物を作っていた。
卒業後はその経験を活かして造形屋で働いたが、一生懸命作っても役目を終えたものは捨てられる。そんな事が当たり前だった。
そんな時、ルーシー・リーの作品に出会う。陶芸の自由さと色の幅の広さに感激。私もやってみたいと思い、陶芸教室と繋がりのあるペンションを見つけ、働き始めた。初めは仕事の合間に教室に通ったが、最終的にはその教室に住み込んで陶芸三昧の日々を送ることになる。
「陶芸には多くの表現方法があり、焼くと色も変化する。最後まで予想しきれないのが、飽き性の私にはぴったりでした。」
制作に没頭していき、本格的に陶芸について勉強したいという思いが強くなった。

腰の高さ程ある
大きな作品。
迫力満点！

その頃、愛知県瀬戸市の窯業学校を知り入学。歴史ある陶芸の産地で沢山の刺激を受けながら、轆轤や型での成形方法、釉薬の調合など様々な技術を基礎から学んだ。

釉薬で輝く瞳。
角度によって
印象を変える。

それでも造形屋時代に感じた『作ってもゴミになる』という考えは頭に残っていた。造形物を作りたいという欲求はあるものの、用途のないものを作ることへの抵抗感は抜けないまま。
そんな時、造形物を手掛ける作家の講義を受ける。
「なぜ造形物を作り続けているんですか？って聞いたんです。すると先生は『これを作らずして死ぬぐらいなら、作って死んだほうがマシだ』と。なるほど、制作ってそういうものだなと思ったら気が楽になりました。」
「自分が作りたいものを作れば良い」ようやくそう思えた。

渡邊さんにとって、食器などの使えるものを作る事、造形物を作る事、どちらも必要不可欠。造形物が上手く作れない時は、轆轤（ろくろ）を挽いたり器の成形をして気持ちを落ち着かせる。
手を動かすことは止めない。

目や鼻、表情が付けられ、
耳が付けられ…
どんどん、命が宿っていく!!

多くの人と直接会い、作品への反応が見られる場は本当に大切。いただいた言葉や想いが次の制作への糧となる。
渡邊さんの優しさ、厳しさ、強さ…多様な感情から生まれる作品たちは、見た人に様々な印象を与える。苦しい時に見たらちょっと勇気づけられたり、悪いことをしたらどこか怒られているように見えたり…。
これからも沢山の人に渡邊さんの作品と出逢って欲しい。